香港から南京入城

大宅壯一

第一信

一

僕は今この原稿を南京郊外湯水鎭の少し手前、山家村といふところにある陸軍砲兵學校の校長室で書いてゐる。こゝの名譽校長は蔣介石で、砲兵出身の彼にとつて、ここは何よりも大切なところだが、それが昨夜陷落して、丁度その後へ僕は上海から長驅到達したのである。

今朝は僕たちの宿舍にあてられた家のすぐ傍に落ちた敵の追擊砲の炸裂で眼がさめた。折惡く味方の砲兵隊が前線へ出發準備をしてゐたところだつたので、死傷者若干名が出た。中島部隊長も昨日大腿部に貫通銃創をうけたといふのですぐ駈けつけて見舞に行つたが、當の部隊長は笑ひながら、

「なアにかすり傷さ」

といつて、相變らず元氣で双眼鏡をのぞいてをられたので、

みんな安心した。

このあたりは丘陵が多く、空氣がすんで、日本の淺間山麓のやうな感である。もう二十日ばかりもいゝお天氣がつづいてゐる。南京附近の秋から冬にかけては、いつもさうらしい。僕も上海に上陸してまだ一度も雨にあはない。

戰爭といふものは、非常に悲慘なものだといふ概念をわれ〳〵はもつてゐるが、こんなにいゝ天氣ばかりつづくと、ハイキングにでもきて演習を見てゐるやうである。

今また爆音が聞える。味方の空軍が南京方面の敵狀を視察してゐるのだらう。敵も退却しはじめたのか、それとも畫めじの支度でもしてゐるのか、砲聲、銃聲が小やみになつた。

上海を立つときは、味方の進軍があまり早すぎて、到底南京入城には間にあふまいと思つてゐたが、やつと最前線にたどりついてみると、入城までには少くともまだ二、三日はかかるといふことがわかつた。敵もかなり頑强に抵抗するし、味方も戰鬪態勢をととのへるため、あまり急追はしないらしい。

そこで新聞社の無電隊も、ひとまづここに腰をすゑて、上海へ通信を送ることになつた。少くとも今日の夕方までは、こゝを出發しない方針らしい。で、僕もこの原稿を書き初めたのである。香港を十一月の二十六日に立つてから十日あまりの間、絶えず追ひ立てられるやうな慌ただしさの中にゐて、今まで筆をとる暇がなかつたのだ。また少しくらゐ時間の餘裕があつても、ものを書く氣持になれなかつたのである。

それが今、最前線にたどりついて、ものを書く餘裕ができたのだから妙なものである。といつても、何時、

「さあ、出發だぞー」

といはれるかもしれない。しかしそんなことを考へてゐては、結局何にも書けないので、とにかくどれだけ書けるか知れないが、ペンをとつたやうな次第だ。

それにこゝの周圍は、非常に快適だ。校長室のデスクも椅子も素晴らしいものだ。これで血腥い事件がすぐ眼の前で起らなかつたら、輕井澤のホテルででも悠々と原稿を書いてゐる感じである。

ところで、何から、どこから、書き初めたものか、迷はざるをえない。香港のことは、前にも書いたが、僕が山本社長などと別れてひとり後へ殘つてから、いろ〳〵の事件が起り、いろ〳〵なことを經驗し、いろ〳〵な事實を知り、いろ〳〵な資料を手に入れた。だが、ここは最前線で、身邊に資料の類は何にもないし、あつたところで、そんなものによつて書く氣はしない。だからそれは別な機會に讓つて、香港出

發以來のルポートだけを送ることにしよう。

二

香港で僕が一緒にきた山本氏等と別れて後へ殘つたのは、もつと深く廣く香港を中心に南支の狀勢を見たいと思つたからであるが、また一つには、せつかく香港まできたのだから、すぐ内地へ歸らずに上海戰線を見たいといふのが念願だつた。ところが、その上海戰線は、僕の香港にゐる間に、どし〳〵進展して、敵の逃げ足は速く、ぐず〳〵してゐると、南京は落ちてしまふかもしれないと、心配（これは少々不穩當な言葉だが）になり出した。そこで上海行きの船に便乘しようとしたのだが、これがまた非常に困難であることがわかつた。

これまで上海、香港間を連絡してゐた日本船は、事變以來上海には寄港しない。だから香港から上海に乘るほかはないのである。

ところが、その外國船に乘るといふことがなか〳〵むづかしいのである。ケビンを申しこんでも、どれもこれも滿員だといつて斷られる。事實、こんどの事變で、上海から香港、マニラ、シンガポール、ヂヤバ方面へ避難してゐた外國人の多くが、最近上海の秩序がほぼ恢復したといふので、續々歸りつつあるからである。

イタリーのコントルツソー號の如きも、香港で一等の空室四つに對して約六十名の申し込みがあつたといふ。こんな狀態では、到底乘れさうにもないので、郵船の香港支店長に頼みこみ、そこで使つてゐる外國人などを通してケビンをとらうとしたが、それも駄目、プレミアムをつけて倍額を出すといつても駄目だ。

しかし之れは滿員のせいだけではない。僕が日本人だといふのがいけないのである。外國船の客はほとんど歐米人だし、ボーイの大部分は支那人だ。歐米人の對日感情がいかに惡化してゐるかは、僕が改めて說明するまでもないし、香港の一ヶ月の生活で僕自身しみ〴〵體驗したところである。だから、歐米人や支那人の間へ日本人がひとり混つて、その惡感情の震源である上海へ乘りこまうといふのだから、船中でどんなことが起るかわからない。何も起らないとしても、日本人が一人でも乘つてゐるといふことは、他の客の感情を害するといふので、なるべく敬遠する方針をとつてゐるらしい。でなければ、一週間も前から豫約さへ斷る筈がない。

そこで僕は、ケビンをとることを斷念して、宿のボーイに頼んで、何等でも乘れるところへ乘る、やむなくばデツキ・パツセンヂヤーにでもなる覺悟をきめて、切符を買ひにやる

と、十一月の二十六日に出るヂヤン・ラボルド號といふフランス船の四等切符を一枚手に入れてくれた。

乘り物にはたいてい三等まであるが、四等といふのは初めてである。いつたいどういふ待遇をするのか、さつぱり見當がつかない。まさかこの寒いのにデツキで寢させるわけでもあるまいが、相當ひどいものであることは明らかである。

香港を夕方立つて、三日目の朝上海につくといふ。それで食事がついて、僅かに二十ドル（香港ドルだから約二十二圓）である。たしかに安いことも安い。ベツドはなるべく持參した方がいゝといふので、二圓五十錢出してキヤンバス・ベツドを一つ買ひこんで、大每支局長の足利君、同盟支局長の松代君、香港における唯一の日本書籍店主の田中君等に送られて、船に乘りこんだ。

ところが、さて船へきてみると、どこへ陣取つていゝのか、さつぱりわからない。あちこちまど〳〵してゐるうちに、出帆の時刻は迫つてくる。やつと船首の貨物室のやうなところが、それだと知つた。

入つてみると、かびくさい匂ひがプンと鼻につく。すでに人と荷物がぎつしりつまつてゐて、息づまるやうだ。送つてくれた人たちは、口を蔽ひ、顏をしかめて僕の方を氣の毒さうに見る。だが、僕はこんなことぐらゐには、決してへこたれない。ただ困るのは、ちよつと便所へでも行つてゐる間に、手荷物がなくなりはしないかといふことだ。金目のものといへば、ライカくらゐのものだが、僅かに骨折つて集めてきたいろんな材料があつて、盜んだ方には何の役にも立たないが、盜まれた方には大變な痛手だ。

見送り人がかへつてしまつて、船が動き出すと、さすがにちよつと心細くなつた。室はいくつにも分れてゐて、一室に凡そ百人ばかり入つてゐる。大部分は支那人で、印度人がいくらか混つてゐる。二階つきの鐵床があるが、半分は蒲團さへもついてない。その間には大きな手荷物（たいてい世帶道具一式）がぎつしりつまつてゐて、通行するのは容易でない。

僕はやつと僅かな隙を見出して、そこにキヤンバス・ベツドを開いた。すぐ傍に四十歳あまりの夫婦とその息子らしい二十歳前後の男の三人づれがゐて、これが親切に手傳つてくれた。英語も多少わかるらしい。僕とどちらも怪しげな英語で話しあつたところによると、彼等は麻雀製造職人で、これからまた上海へ歸つて行くのである。

船は相當ゆれてゐるが、僕は今日出發準備で忙しく、晝飯も滿足に食つてゐないので、腹はぺこ〳〵だ。しかしいつどこで、飯が食へるのかわからない。或は今夜は出ないのかも

しれない。

二圓五十錢のベッドの上で、我慢じて寢ようとしたが、なか〳〵寢つかれない。そのうちに、相客たちが甲板の上へ向つて、階段をのぼりはじめたので、僕も起き上つてその後をつけた。荷物が心配だが、そんなことはこの際かまつてをれない。

甲板は眞つ暗だ。空には星ひとつない。海は荒れてゐる。よろめきながら列について行くと、階段にきた。それを降りて、さらに第二、第三の階段を降つて、船底らしいところに出た。すると帳場のやうなしきりがあつて、その向ふから、汚い前かけをして、太つた腹を突き出したフランス人が顏を出した。頭にコック帽をかむり、手に大きな料理庖丁をもつてゐる。映畫によく出る型だ。

そのコックが僕たちに向つて、

「一弗！」

と叫ぶと、みんな香港の一弗札を出した。僕も彼等に倣つて出した。するとそれと引換へに、アルミニュームの皿とフォークとコップを一つづつくれた。だが、その中には何も入つてゐない。

に質屋の窓口のやうな孔があいてゐる。

それにさつきもらつた皿とコップを出すと、飯に、肉と野菜の煮込みを添へて入れてくれた。コップには赤味をおびた湯が入つてゐる。

アルミの皿もコップも、熱くて手にもつてをれない。おまけに船はゆれる。元きた階段を三つも四つも下つたり上つたりして甲板に出ると、コップの湯はすでに半分くらゐになつてゐる。なめてみると、これでも紅茶らしいが、ちつとも甘くはない。

これで一弗とは高い。しかし食事附だといふのだから、この一弗といふのは、或は四等船客のボーイへの均一チップなのかもしれない。

だが、食つてみると案外うまい。飯の煮方なども、内地から香港へ行くときに乘つた歐洲航路の照國丸よりも遙かに上出來である。どこでも船の一等のメニューは、食ひきれないほどいろんなものを毎日竝べ立ててゐるが、實際はうまいものが二品くらゐあつた方がいゝ。少くとも僕のやうなものには、その方が有難い。

さて食つてしまふと、食器類をどう處分していゝかわからない。隅づこへおかうとすると、印度人から叱られた。彼等は二三人づつ一組になつて乘つてゐるが、すべて上海のお巡

りさんらしい。たいてい手製の若草なベッドをもちこんでゐる。蚊帳が頭にぐるぐるまいてゐる布をとつたところを初めてみたが、彼等の素顏でなくて素頭は、髮をまんなかで小さく結つて、丁度角力のふんどしかつぎのやうである。

僕を叱つた後で、その印度人は自分について來いと英語でいつた。便所の近くらしく、嫌な匂ひのプンとするところに水の出口があつて、そこで自分で洗へといふのだ。

ついでに便所へ行つてみると、まるで軍隊の馬小屋のやうに、低い板でしきりがしてあつて、中で立つと外からまる見えだ。洗面所らしいところは、いづれも赤くさびついてゐる。後で氣がついたことだが、これは洗面所でなくて小便をするところなのだ。

洗面所もあることはあるが、栓をひねつても水が出ない。一等の便所は、大いてい大きな家が立つほど金をかけて豪奢にできてゐるが、こゝの便所は、まつたく慘澹たるものである。世の中のことはすべてかうなんだが、特に一つの船の中の便所にそれがもつとも端的に現れてゐるのを面白く思つた。

印度人巡査の指令に從つて、洗つた皿は僕のベッドの下にしまひこんだ。明日からこれで飯を食ふのだ。

船がゆれるので、本がよめない。ゆれなくとも、船室が暗くて、すぐ眼がつかれる。結局眠るほかはない。

默つて見てゐると、列はまた動きはじめて、さらに大きな料理場の前に出た。こゝは廊下との間に鐵柵があつて、それ

香港の約一ケ月の生活は、毎晩寢るのがおそく、朝は起きるのが早く、何となく周圍が慌ただしくてゆつくり寢られなかつたが、急に解放された氣持で熟睡したと見えて、翌朝目がさめたのは九時頃だつた。

もう朝食の時間はすぎたのか、誰も出て行きさうな氣配はない。面倒だから我慢することにしよう。

すき腹をかかへて、香港で買ひ集めた抗日宣傳物をよみつづけながら、晝飯を待つたが、一時になつても、誰も出て行かない。或は晝食といふのは四等客にはないのかもしれない。そこでなほも我慢して、新聞をよんだり、うと〳〵眠つたりしながら夕食を待つ。

夕食は比較的早く出ると見えて、五時すぎにはぞろ〳〵動き出した。それについて、例の太つたコックのゐるところへ行つて、また一ドル札を出すと、こんどは要らないといふ。昨夜のはやはりチップだつたのだらう。

夕飯は昨夜と同じやうな內容だが、ひどく腹が減つてゐるのと、やや船に慣れてきたのとで、非常にうまく、飯粒を一つも殘さずに食つた。海は昨夜ほど荒れてゐないが、空模樣は相變らず暗澹としてゐる。

それに困つたことが一つできた。キャンバス・ベッドがメリ〳〵と裂けはじめたことだ。二圓五十錢のものに、二十一

貫のからだを托さうとするのが土嚢無理だつたのかもしれない。

傍の支那人は、上海では一回も出せばキャンバスを取りかへることができるから、もうその上で寢ない方がいゝといふ。しかし後のこととよりも、さしあたりどこでどうして寢るかといふことが、僕にとつて目下の大問題だ。

幸ひ空いてゐる鐵ベッドが一つ見つかつたので、それにトランクに一杯もつてきた新聞をしきつめ、その上に身を横へた。香港はまだ暑いくらゐだつたので、防寒の用意はちつともして來なかつたが、上海に近づくにつれて段々寒くなつて閉口した。合齋のオーバーとドテラのほかに、上へかけるものは何もない。

飢ゑと寒さで、その翌朝は、五時頃に目がさめた。隅の方で赤ん坊がギャア〳〵泣いてゐる。

冬の船底の夜明けはおそい。六時頃、太陽を促したい氣持ちで甲板に出てみたが、まだ空は暗く、寒い風に吹きつけられて、すぐに退却した。

やがて隣りの支那人たちも起きて、何かバリ〳〵食ひ出した。印度人たちは、持參の水筒のお茶をのんでゐる。

支那人夫婦は、僕の腹工合を察してか、食つてゐるものを僕にもすすめた。砂糖の入つてゐないビスケットだ。その幾分鹽氣を含んだそづけない味が、かみしめるとたまらなくうまい。

八時頃になつて、やつと朝食にありついた。中味は夕食とほとんど同じである。慣れたせいか、野菜と煮込みにした肉の味もすてがたい。

ほかにすることがないので、今日も新聞をよみつづける。厄介な支那字新聞も、近頃は少し慣れて、大體の意味はつかめるやうになつた。

十時頃船員がやつてきて、國籍や身分を書き込む紙と、稅關にわたす手荷物の內容申告書とを配つて行つた。

印度人は英語を話すが、字が書けないので、僕に書いてくれといふ。一人だけアルファベットくらゐは知つてゐるものがゐて、それが一同の名前のスペルなどを說明した。隨分面倒で弱つたが、これによつて印度人の名前には、必ず最後にingの四字がつくといふことを知つた。

今日は晝中ずつと眠らずにゐたが、やはり晝食は出なかつた。それでも香港から上海まで三日の旅が僅か二十ドルでできるのだから、安いことも安い。きいてみるとそれも皆均一ではないらしい。支那人は十七ドルで、印度人は二十五ドル出したといふ。從來の慣例に從つて、人種の高度を金錢本位できめると、二十ドルの日本人は、十七ドルの支那人と二十

五ドルの印度人の丁度中間に位するといふことになる。事實、英國人やフランス人は、日本人をその程度にしか見てゐないのかもしれない。

夕食がすむと、いよ〳〵明日は上海上陸だといふので、この船に大勢乘つてゐるフランスの派遣軍は、酒をのんで、大きな聲で歌をうたひながら、甲板や廊下をぐる〳〵廻つて騷いだ。

フランス人といふと、日本のインテリはすぐリファインされた人間を想像し、船員でも、小說に出てくるやうないきな男を頭に浮べるが、フランス人でも下級船員とか、兵卒とかには、隨分無知で、下品なものが多いやうだ。英國人にしてもやはりさうで、これは香港できいた話だが、あすこの水兵の中には、自分は水雷艇の乘組員だからといつて、英國の東洋艦隊の旗艦の名前さへも知らないものがゐるさうだ。

そこへ行くと、日本人の方がずつと知的水準が高い。民族全體の知的平均水準を比較すれば、日本人は世界最高とまでは行かないまでも、少くとも英米人に比して、まさるとも劣つてゐないのではないかと思ふ。

船が東に進み、海水が赭く濁つてくるにつれて、次第に寒さは加り、三日目の夜半は本格的の冬になつた。この生活も今夜だけで終るのかと思ふと、ちよつと殘り惜しいやうな氣がする。初めて四等の船室へ入つたときは、さすがに氣味が惡かつたが、慣れてみると、一等船室などよりはかへつて興味もあり、氣が樂だ。

豪華船であればあるほど一等船室は、外界から完全にシャット・アウトされて、一つの城塞のやうに孤立してゐる。他人と顏を合せるのは、食堂や喫煙室に限られてゐる。そこでも皆つんとしてゐて、たま〳〵隣りあつた未知のものが話しあつても、その內容は極めてお座なりである。

そこへ行くとわれ〳〵四等船客は、乘船中は全生活をあげて接觸してゐる。氣持の上からいつても、すぐに溶けあつて、お互同志非常に親切である。話すことも一々具體的で、興味津々たるものがある。

皿とコップをもつた列に加つたりするのは、みじめな氣持がするが、それだけにお互の間には、一等船客に見られない溫かいものが流れてゐる。どこでも貧民層のもつてゐるカムレードシップだ。船は社會生活のモデルであり、そこでの階級的差別は實生活以上にはつきりしてゐるので、それだけ反射的に、下層間のカムレードシップも強くなるわけだ。

夜があけるといよ〳〵上海だ。日本の軍艦の游弋してゐるのが眼につく。印度人が盛んに僕に向つていろ〳〵質問する。

揚子江に入ると、軍艦や商船や運送船があちこち群つてゐる。それにはたいてい日本の旗が飜つてゐる。

やがて對岸の建物が見え出した。みんな物凄く破壞されてゐる。殘つてゐるのも外形だけで、壁には蜂の巣のやうに一面に孔があいてゐる。

埠頭につくのも間がないので、荷物を整理してゐると、印度人が僕の使つた食器を指さして、

「一弗々々！」

といふ。何のことだかわからないので、けげんな顏をしてゐると、後へついて來いといつて、先に歩き出した。

行きついたところは、例の太つちよのゐるコックの部屋だ。そこで印度人の指圖に從つて、皿とコップを差出すと、一ドル返してくれた。何のことはない、この一ドルは皿やコップの保證金だつたのである。

こゝまで書くと、前面の敵が敗走して新聞社の自動車がさらに前進するといふので、ひとまづこゝで擱筆する。

三

南京を距る二里、騏麟門附近の民家でこれからこの續稿を書くのである。

夕方このあたりを歩いて徵發しておいた原始的なランプが唯一のたよりである。一日中自動車でゆられたり、歩いたりして、夕方宿舍を見つけ、それからハンゴーで飯をたいて、それを食つてから、從軍記者としての明日の作戰について協議し、靴のみ着のまま蓆の中にころがつて寢るのが早くて十時、少しまど〳〵してゐると十二時をすぎる。それから原稿を書くのである。

今夜は民家で汚いがベッドを一つ見つけた。寢る前に少し書いておきたい。

時間は十二時ずぎ、寒さはぞく〳〵と身にしみる。どこかで猫が啼いてすこぶる氣味が惡い。

僕が上海へついたのは、蘇州が落ちて無錫を攻擊してゐた頃で、前線はもう三十里以上も遠ざかつてゐる。それを追つかけて最前線に出る計畫を一度立てて、二度とも途中の故障で引きかへし、三度目にやつと成功した。そのとき味方はもう南京城外七里位のところに進んでゐた。

最初は夜の十時頃、自動車で上海を出發した。途中陸戰隊の警備で、幾度も誰何された。特に閘北の出口では、從軍腕章を見せただけでは駄目で、陸戰隊本部に電話をかけて、身元を確かめた上、やつと通ることを許された。そしてこの先で誰何されたら「大砲」といへ、これが今夜の合ひ言葉だと

教へられた。

閘北の最後の警戒線をすぎると、自動車もヘッド・ライトをつけることができる。深夜だけれど、途中は輸送車輛やトラックでかなり混雜してゐる。

闇の道を大每の社旗を飜へした自動車がまつしぐらに走つてゐる。迫つてくる寒さと前線へ行くといふ緊張感で、からだがぐつと引きしまる。

途中で車をとめて小便をすると、黑い大きなものが足もとに横つてゐる。じつと眼をすゑてみると、馬の死骸だ。

所々で兵隊が、野宿したり、焚火をしたりしてゐる。遠くには兵火に燒かれた民家がまだ燃えつづけてゐる。

上海から無錫まで約三十里。二三日前に落ちたばかりで、まだ盛んに燃えてゐる。これから先は彈列がつづいて動けさうにないので、無錫の入口で夜明けを待つことにする。こゝは支那の重要な產業都市だけあつて、ふだんは隨分賑かなところだが、今はすつかり死の町に化してゐる。

自動車の中で寢ようとしたが、寒くて眠れない。兵隊さんの焚火に割りこんで、あたらしてもらふ。

夜があけると、上海からもつてきた握りめしを食つて、和知部隊長を訪問する。街の中のクリークに沿うて、火事で車の通らない道を十五六町も、香港からあづかつてきた慰問袋を連絡員と共にかついで行く。

支那人の姿はめたに見られない。見ればたいてい老人で、腕に日の丸の記章をつけてゐる。白布に赤い布を不細工にぬひつけたのもあれば、赤だか紫だかわからない色で日の丸を染めぬいてゐるのもある。

塀といふ塀には、必ずペンキで抗日宣傳文が書かれてゐる。中には一字が一坪以上もあるくらゐ大きなのもある。小學校などの前には、空爆の光景を毒々しく書いて、防空思想を鼓吹してゐる。

「抗戰到底」(徹底の意)とペンキで大きく書いた下に、白墨で退却の進路や集結地が指定してあつて、ちよつと皮肉である。しかしこゝは四日間も抵抗しただけに、通りにも塹壕やトーチカめいたものが策かれてゐる。わが空爆の跡は、煉瓦の屋根をぶちぬいて、大きくしロを開いてゐる。

家々の入口には、赤紙にどこで覺えたのか「皇軍歡迎」とか「東陽大將軍歡迎」とがか書いたのが貼り出してある。こゝは昔から兵火を浴びてゐるので、かういふ手は心得てゐるのだらう。日本軍も、支那の軍閥と同じやうに思つてゐるところ、かへつて愛嬌があつて面白い。

和知部隊長の宿舍は、○○部隊のすぐ隣で、この邊には珍らしい堂々たる洋館の中にある。部隊長は、鄰の蒼黑い精悍

な感じのする人だが、あまり単人くさくない。話はテキパキしてゐる。香港からの慰問品を届け、香港、マカオ、廣東、廣西、厦門、福州などの狀態について話しとんだ。

それから市街（といつても大部分燒跡だ）をぶら／＼見物して、一時頃常州に向つて出發した。途中戰車隊の列が長々とつづいて、なか／＼車は進まない。

しかしこの邊りは、無錫からの敵の逃げ足が早く、味方の追擊も急だつたので、道路や橋はあまり破壞されてゐない。江陰を陷れて南京に向ふ砲車隊が長くつづいてゐる。

常州は蘇東坡の遺跡のあるところだときいてゐるが、今はそんなものを訪ねる暇はない。町の物凄く破壞されてゐるが、敵の遺棄死體はあまり見られない。

常州からクリーク沿ひの道を丹陽に向つて進む。このあたりの田は二毛作で、今は麥が伸び、そらまめが芽を出して、內地とちつとも變らない。楊柳の葉は落ちて、所々大きな四つ手網がかかつてゐる。いつもなら家鴨の群が泳いでゐるところだが、支那兵に食はれてしまつたのか、一羽も見えない。

このクリークを日本軍が日の丸を立てた民船に乘つて前進してゐる。腕にやはり日の丸をつけた土民が堤を歩きながら曳いてゐる。かうした船の長列が、ほとんど十間ときれることなしにつづいてゐる。

常州から二里位くると、本道は橋が破壞されてゐて、舊道を進むほかはない。その舊道はやひどいもので、車は無理をすれば進めないこともないが、絶對に行きちがひがないので、下手すると身動きがならなくなる。

そこでわれ／＼一行は、車をすてて歩くことにする。ずつと車で前線まで行けるつもりでゐた僕は、リュックサックの用意をしてゐないので、ボストンバックに紐をつけて肩にかけて歩くほかはない。

夕暮れが迫つて、クリークには薄いもやがかかつてゐる。遠くに殷々たる砲聲が聞えるが、周圍の景色は極めて平和で、のどかである。

丹陽は今夜あたり落ちるらしいといふ。もう落ちたといふものもある。これでは前線に達するには、少くとも十里は歩かなければならない。いや、その間に敵がどし／＼逃げれば、もつと長くなるかもしれない。

砲車で荒されたでこぼこの多い道を、足もとに氣をつけながら默々と進む。時々敵の遺棄死體をふんづけるのはいゝが、下手するとクリークに轉げこむ恐れがある。

すでに日はとつぷり暮れて、民家の燃える火が、白い煙の中に赤い焰を見せて、村火事を見るやうに美しい。その村火事を追つて、遠くの知らない村までかけて行つて、歸る道が

わからずに泣き出した子供の頃の記憶が、甘すつぱく頭の中によみがへつてくる。

空は星を撒いたやうで、宵の明星が、クリークの水にダイヤのやうな影を宿してゐる。僕たちが進むとそのダイヤもすすむ。

三里ばかり行くと、これから先はまだ殘敵が出沒するので危險だと、焚火をしながら警戒をしてゐる兵隊さんから注意された。そこでしばらく休憩して、ハンゴーで煮たしることごちさうになる。しることといつても、どこかこの邊の民家で見つけてきた小豆に黑砂糖を入れて煮ただけだが、疲れてゐるので非常にうまい。

それからさらに一里ばかり進むと、人通りがほとんどなく、身に寸鐵をおびないものの通行は危險極まるので、この邊で寢ることにした。といつても民家は容易に見つからず、見つかつても殘敵が潛伏してゐる恐れがある。やつと傳令に行つて歸つてくる兵隊さんに會つて、彼等の宿舍に案內してもらつた。大して大きくもない農家に、三十人ばかり泊つてゐる。僕たちもその中に割りこんで寢たが、一時頃になると寒くて眠れない。考へてみると、つい一週間前まで香港にゐて、眞夏のやうな服裝をしてゐたので、冬仕度は十分にできてゐないのだ。

これでは南京まで到底ついて行けさうもないので、明日は一行と別れて、僕だけ上海に歸り、改めて出直すことにした。とゝまできて殘念だが仕方がない。

翌る朝、常州から上海へ寫眞を送る自動車便があるといふので、それに間にあふやうに、未明に起きて宿舍を出た。またクリーク沿ひの道を、こんどはたつたひとりで歩くのだが、二度目だから、氣が樂だ。

しかしものの三町と行かないうちに、すぐ近くで銃聲が起つたのでびつくりした。恐る／＼近づいてみると、哨兵がひとり立つてゐた。クリークの向ふ側に敗殘兵の姿を認め、誰何したが返事をしないので、發砲したといふのである。すると敵はクリークに落ちて、浮きつ沈みつ、流れて行つたさうである。

それから約二里ばかり行くと、夜はすつかり明け放れて、クリークには湯氣のやうな霧がはつてゐたが、突然右手にすさまじい銃聲が起つた。機關銃の音も混つてゐる。しかしそれは三十分ばかりでやんだ。やはり殘敵が出たらしい。

かくて昨日自動車をすてたところまで行くと、こちらをむいて盛んに手をふつてゐるものがある。近づいてみると、東日寫眞部の橋本君と中央公論の八重樫君だ。彼等も前線へ出るつもりでとゝまできたが、やはり斷念して歸るところだと

いふので、一緒にその車に乘つて、夜おそく上海についた。

二回目の前線行きは、二日おいて五日の朝、こんどは蘇州廻りで出發した。明るいうちに蘇州の風光を見たかつたのである。

崑山府近の農民は、收穫前に避難したと見えて、稻はまだ刈りとつてないところが多い。それが最近ぼつ〳〵歸つてきたと見えて、あちこちで稻刈りをしてゐる。これがまたみな腕に日の丸をつけてゐるから面白い。

崑山と蘇州の丁度中程で、敵の遺棄死體を驚くべく多量に見た。焚火をしてゐるところへ、迂回して先廻りした日本軍に、側面から突然打たれたらしく、附近に食器類がごろ〳〵してゐる。小銃彈や手榴彈もやたらに散らばつてゐる。

と〻で敵の鐵兜を一つひろつて更に一里ばかり行くと、急に自動車のエンヂンがとまつてしまつた。何と修理しても動かない。コイルを取りかへないと駄目らしい。

一度ならず二度までも引きかへすのは殘念だが、この非常時にはそんなことはいつてをられない。丁度折よく將校を一人乘せた自動車がやつてきたので、それに乘つて上海へ歸つた。

翌七日の夕刻、形勢が急變して、いよ〳〵南京陷落が迫つたといふ知らせが前線からきたので、急にまた上海から車が出ることになつた。それに乘りおくれたら、もう前線への便はないから、南京一番乘りには間に合はないといふ。

僕はアスター・ホテルにゐて、電話でその知らせをうけて、すぐに出發の用意にとりかかつた。防寒具その他を仕入れたいが、虹口の日本人商店はもう店をしめてゐる。南京路へ行つてみたが、デパートはしまつてゐるし、僕のほしいと思ふものは手に入らない。

そこで佛租界のアベニュ・ヂョッフルで、セコハンの皮のコートと皮オーバーの僕に合ふのをやつと見つけて、大急ぎで大毎上海支局に歸り、夜半の正十二時、三度び前線へ向つて出發した。

途中二回ばかりパンクその他の故障があつて、またかと心配したが、こんどは比較的早く修理ができて、七日の夕暮近く、南京を距る五、六里の第十六師團司令部に到達したのである。そしてその晩は、目下日本軍の師團司令部にあてられてゐる陸軍砲兵學校の校舍の一部、傳達室といふのに寢た。

朝になつてそこにあつた机の抽出しをあけてみると、紙片が一つあつたが、それに日本語で戰術の講義草案のやうなものが書いてあつた。多分日本の士官學校出身者なんだらう。

大體この邊で、書き出しの部分と時間的に一致するところまできた。これから先南京入城まで、(それも今日明日に追つてゐるが)日を追うて、現地での實感をそのまゝ傳へて行きたいと思ふ。

今、南京城を守る生命線紫金山を前にして、この稿を書いてゐる。時は十日の夕刻だ。頭の上で氣球を打つ高射砲が炸裂してゐる。その間を味方の飛行機が低く旋回して通信筒を落してゐる。

南京城内に打ち込む二十五糎砲が、すぐ近くで凄い音を立て、そのたびに思はずペンがとまる。

一時間ばかり前五六町先に追擊砲彈が落ち、兵二名、馬二頭即死、兵一名負傷したが、その負傷兵が、輕繃帶をして、今僕たちの前でそのときの樣子を話すのが面白いので、ひとまづペンを擱いて、その話に耳を籍さう。

第二信

一

舊臘日本に歸つて、この原稿は、自分の家で、いつもの通り炬燵の上に板をのつけて書きはじめたのだが、なか〳〵筆が進まない。それよりも第一筆をとる氣にならなくて困つた。三月號の締切りのギリ〳〵眞際になつてやつととりかかつた次第である。

彈丸の音がどこかで聞えないと、飯を食つてゐてもうまくない、などと近頃冗談半分によく放言してゐるが、うまくないのは飯ばかりでなく、生活に緊張味が失はれて、何だかモヒ中かアル中患者の藥がきれたやうで、からだや心の中に空虛を感じる。急に高山へでものぼつて壓力の稀薄な空氣の中へ放たれたやうな氣持である。

死骸の浮んでゐるクリークの水でたいた變な色の飯を食つて、糞くさい糞の中で、焚火の煙にむせびながら寢てゐるときには、よく銀座を想ひ出し、コロンバンのお茶やスエヒロのビフテキを夢にみたものだが、さて歸つて毎晩のやうに銀座を歩いてみても、何だかピッタリしない。廢墟になつた上海の閘北や、炎々と燃えつづけてゐる蘇州や無錫、廣い街路に犬の子一匹ゐない入城直後の南京などを見なれた眼で、年末年始の銀座を見ると、あまりにも賑やかすぎて、現實離れがしてゐるやうである。

その賑やかな通りを歩いてゐて、突然、これは夢の中の場面で、ほんとうはこの邊一帶が廢墟なんぢやないかと思ふと

とがよくある。そこで歩をとどめて、確かにこれが現實だぞと自分自身に納得させるのに骨が折れるくらゐである。

僕が日本を出る三月ばかり前は、こんなではなかつた。連日、いたるところで、出征軍人見送りの旗の波が見うけられ、軍歌の合唱が轟きわたつてゐた。ところが、最近の日本は平和そのものである。あれだけの大軍を大陸に送り、國運を賭して戰つてゐるのか、と疑ひたくなるくらゐである。

もつとも、農村はさうでもないだらう。都會でも、出征軍人をもつ家庭の中に入つてみれば、前線と同じやうな不安と緊張の空氣が漲つてゐるであらう。だが、街頭からうける印象のみについていへば、あまりにも戰爭放れがしてゐる。恐らく前線の勇士を誰か一人拉してきて、突然この雰圍氣を見せたら、これが日本だとは容易に信じないであらう。

それがいゝとか惡いとかいふのではない。一面からいふと、それだけ日本が偉大になつたのだともいへる。しかし僕たちのやうに、前線を見たり、香港あたりの緊迫した空氣の中で生活してきたものには、少々不安を感じるほど平和的である。

これは僕だけかと思ふと、さうではなくて、前線から歸つてきた新聞社の特派員たちもみんなさう云つてゐる。この間榊山潤君に會つたが、彼もどうかして再び前線に出たいといつてゐた。

よく考へると、或は僕たちは、危險に伴ふスルリに中毒してしまつてゐるのかもしれない。そしてこれは山に中毒してゐるアルピニストと同じ心理かもしれない。

いづれにしても僕は、戰局が更に展開したら、もう一度前線に出たいと思つてゐる。

それはそれとしてこの報告だけは一應完成させなければならない。第一信は陣中あらゆる不便をしのんで、僅かな暇々に書きつづけ、本紙の新年號に十分間にあふやうに、十二月十一日の朝、新聞社のトラックで最前線から上海にとどけてもらひ、十二日に飛行便で內地に向けて發送されたのであるが、途中でどこをどう迷つてゐたのか、東京についたのは二十日だつたといふ。

だから、今その前後のことを少し補足して南京入城に及び、改造社や讀者に對する僕の責任をまづ果し、このつぎの機會は、もう少し組織的なルポルタージュを書きたいと思つてゐる。それも戰局が急展開をすれば、どうなるかわからないが。

二

僕は南京の正門である中山門に向つて進軍してゐる中島部

隊に從軍したのであるが、その途中には、支那の砲兵學校や歩兵學校などが散在してゐて、いはば敵のホームグランドである。トーチカもいたるところに築かれてゐる。

わが軍の占領直後にそれらのトーチカの中に入つて、よくトランプや麻雀牌などの散亂してゐるのをみた。また中には香水の匂がプンとして、髮油や女の肌繻絆などの殘つてゐるのもあつた。これは、却つて支那の若い婦人たちが、あらゆる危險を冒して最前線に出て、兵士を激勵し慰問すると共に、ときには彼女たちも銃をとつて闘つてゐる事實をも示すものではないかと思ふ。

香港でみた支那側の戰爭映畫をみると、あらゆる場面に若い婦人が出て、積極的に活動してゐる。或る場合には、男子よりも勇敢で、能動的なのではないかと思はれる點も少くない。それは婦人が激情的で、いはゆる「抗日救國」の宣傳に動かされやすいやうでもあり、また特に支那婦人の性情がそんな風に出來てゐるのではないかとも思ふ。一般にかういふ過渡期、激動期には、性の如何を問はず、若き血に燃ゆる靑年層がもつとも大きな役割を果すものである。日本でも左翼華かなりし頃、各分野で若い婦人がハウスキーパーやレポーターなどとなつて、男子同樣に、ときには男子以上に大膽にやつてのけた。大體それと同じやうな現象が、現在支那側の陣營においても起つてゐるのではないかと思ふ。

十三日の朝未明に、僕たちは占領直後の中山陵に一番乘りしたとき、孫文の像のあたり、炊事道具の散亂してゐる中に、編みかけの毛絲の帽子もあつた。

それから陵を降つて中山門に向ふ途中、道傍の林の中に、恐らく負傷兵を包んだものであらう、血に染まつた大きな白い旗が落ちてゐた。拾つてみると、「女子遺族學校」と染めぬいてあつた。この旗は恐らく血ぬられてまだ何時間もたたないらしく、僕に非常に强い感銘を與へたので、僕はそれを大事にして紀念のため日本までもつて歸つた。

また、僕はつひに目擊する機會をもたなかつたが、敵の遺棄して行つた死體の中に、婦人で軍裝をして正規軍とちつとも變らないのも少からずあつたといふ。彼女たちも、あの支那人の好きな悲壯なヒロイズムに浸つて死んで行つたのであらうが、殘された品々を見て彼女たちを包んでゐる空氣を想像するとき、われ〳〵もやはり一種悲壯な感じに打たれざるをえない。

南京入城の三四日前、潟山鎭といつて溫泉のある部落で一泊した。溫泉ときいて日本のそれを想像し、前から樂しみに

してゐた僕たちは、來てみてがつかりした。たしかに溫泉にはちがひないが、風呂場は薄汚く、設備は惡く、周圍は殺風景そのものである。それでも兵隊さんや僕たちは、久しぶりでゆつくりお湯に浸つて戰塵を洗ひ落し、入城前の身を淨めることができた。

それからこのあたりに蔣介石の別莊があるといふので、暗い田舍道をあちこちきいて歩いたが、つひに見つからなかつた。ここに砲兵學校の官舍があり、蔣がその校長なんだから、それが誤り傳へられたのだらうといふ話だつた。とにかく支那人は、日本人のやう入浴の好きな國民でないことがはつきりわかつた。これは一つには、きれいな水が少いからでもあらうと思はれる。

南京に近づくにつれて、道に地雷が多く、僕たちも隨分おびやかされた。地雷などといふものは、日清日露戰役時代のもので、近代戰爭に用のないものと思ひこんでゐたが、とんど支那側は盛んにそれを使用した。

書ならたいていわかるので、工兵が掘り起してゐる。僕たちの通る頃には、橋のたもとなどに、丁度フライパン位の大きさのが、數箇乃至十數箇掘り起して竝べてあるのをよく見かける。

それでも時には氣がつかなくて引つかかることもある。麒麟門で僕たちの前を進んでゐる砲兵が、馬もろともはねとばされたが、その際僕より少し先にゐた東日の淺海君は、その砲兵が空に舞ひあがりながら、

「天皇陛下萬歲！」

と叫んだのをはつきりきいたといつてゐた。しかし幸ひその兵士は馬に乘つてゐたので、重傷ですんで命は助かつたさうである。

その前に僕たちも危く助かつた。といふのは、麒麟門の半里ばかり手前を歩いてゐるとき、前を行く戰車の砂煙があまりひどいので、それを避けるべく道の端の並樹の方へ寄らうとすると、その近くの田圃の畔で休憩してゐた數人の兵士が一齊に、

「危い！」

と叫んだ。誰のことだかわからないが、僕たちは思はず立ちどまつて、あたりを見廻した。すると僕のすぐ足もとに、並樹の枝をたわめてその上に石が一つのつかつてゐるではないか。それが地雷なのである。

注意をひくために、誰かその上に紙をぶらさげておいてくれたのであるが、そんなものに氣がつく筈はなく、もう少しで蹴とばすところであつた。さすがにそれと知つたときは、

からだ中とわばつて、しばし聲も出なかつた。

それやこれやで恐れをなして、それに日もくれかかつたので、僕たち、といつても、僕と東日南京支局長の志村君と二人だが、これ以上進むことを斷念して、三里ばかり後方の社の無電隊のゐるところまで退くことにした。地雷といふのは、第一線が通過した後でも決して安全とはいへないのである。

日がくれると、いつどこから敗殘兵が出てくるかもしれない。もしかすると途中で社の自動車に出あふかもしれないが、それはあてにならぬ。無電のゐるところまで行きつくまでには、今日占領したばかりの山を二つ超えなければならない。おまけに日がくれると、日本軍の姿はどこにも見えない。

身に寸鐵をおびない僕たちは急に心細くなつた。こんなことなら、麒麟門で野宿でもするんだつたと思つたが、もうおそい。

周圍の山には樹がなく、いたるところ枯草が燃えひろがつてゐる。丁度奈良の水とりか、京都の大文字山の釋來まつりのやうで美しいが、それがかへつて不氣味である。

薄月が沈んで暗い路を一里ほど行くと、晝飯を食つてないので腹はペコ〳〵だ。リュックサックは自動車に預けてあつて、防寒具は何一つなく、寒さが骨にしみてくる。

丁度そこへ、向ふから靴音が聞えた。立ちどまつて耳をすますと、日本語で話してゐるから友軍らしい。で、安心してこちらも不自然に大きな聲で話しながら近づくと、やはりさうだつた。三人でこれから一キロばかり先まで傳令に行くのだといふ。

僕たちの話をきいて、ひどく同情し、これから先は危險だからといつて、その中の一人が銃を一つ貸してくれた。そして彈のこめ方や打ち方を親切に敎へてくれた。借りるのはいいが、どうして返せばいゝかときくと、

「君たちがぶら〳〵歩いてれば、こちらは用事を了へて引きかへしてきてすぐ追つつくよ。」

といふので、僕たちは、幾分心丈夫に思つて、再び歩き出した。だが、いくらゆる〳〵歩かうとしても、自づと足が早くなるらしく、後からさつきの兵隊さんがなか〳〵追つついてくれない。

一里ばかり行くと、十戸ばかりの部落が見えた。友軍がゐるらしいから、そこで今夜は泊ることにしようと思つたが、それにしてもこの銃を返さなくちやならない。どうしようかと思つてゐると、道傍で焚火をしてゐるのが目についたので、その傍へ行つて、さつきの兵士たちがくるまで待つことにした。

焚火でからだがいくらか暖かくなると、急に飢ゑが耐へがたくなつて、その焚火をしてゐる兵士に、何か食ふものはないかときくと、彼等も今夜は一人前しかない飯を二人でわけて食つたばかりで、やはりひもじいから、畑につんであつた唐もろこしの殼の中から少しでも實のあるのを見つけて、今それを燒いて食つてゐるのだが、それでもよければ一つや二つわけてあげてもいゝといふ返事である。

志村君もよほどひもじいと見えて、眞黒にこげた固いのをバリ〳〵と食ひはじめたが、齒の惡い僕はほしくても手が出ない。それを見てもう一人の兵士は氣の毒がつて、背嚢の中から大事さうにしまつてある小さな紙包をとり出した。何かと思つたらほんの一匙ほどの赤砂糖だ。これは無錫からずつともつてきたものだといふ。

僕はいくらひもじいといつても、無電のところに行きつきさへすれば食ふものがあるのだから、この貴重なものをもらつて食ふ氣になれず、幾度も辭退したが、向ふはどうしても食へといつてきかない。そこでつひにその好意をうけて、少しづつ舌の先にのつけて味つた。

さうかうするうちに、軍用トラックが一臺やつてきて、僕たちのすぐ傍にあつた死體を收容した。それは今日こゝで戰死した友軍の兵士だつたのだ。焚火をしてゐた人たちは、その戰友で、その死體を守りながら引きとりにくるのを待つてゐたのである。

間もなく僕たちに銃を貸してくれた兵士たちもかへつてきた。彼等は三輪車に乘つてゐて、僕たちもそれにのつけてくれた。走り出すと文字通りに身をきるやうに寒いが、その代り安全に、しかも二十分足らずで、目的地に到達して、やつと蘇生の思ひをした。

三

南京陷落が迫つてくるにつれて、上海方面からいろんな人が前線へやつてきた。

十日には、東日の自動車に便乘して中川紀元畫伯がきた。會ふのは初めてだが、豫想したよりは若々しい、元氣な人だつと思つた。それから二人はよく一緒に戰線をぶら〳〵歩いた、中川氏はスケツチ・ブツクを、僕はカメラをさげて。

晩に汚い民家で、僕が焚火の傍にところがつてゐるところを中川氏はスケツチしてくれた。そのとき氏のいつた言葉が面白い。かういふ場合に臨むと、繪はどうしてもカメラに適はない。なぜかといふと、第一繪はどんなに苦心しても現實の汚さ、醜さをありのまゝに表現することができないからであるといふのだ。

なるほどさういへば、現實の醜惡をそのまま表現しうる藝術は、文學と寫眞だけではないかと思ふ。それだけ兩者はリアリズムの藝術で、現實に醜惡の存する限り、これらの藝術の威力は決して衰へないのではあるまいか。

同じ日に、別なコースを通つて、「文藝春秋」の小坂英一君がやつてきた。何でもこゝへくる運中、敵の機銃に狙はれて、地べたに這ひつくばつて危く逃れてきたさうだ。

さういへばその頃、われ〳〵非戰鬪員の訃報がしきりに入つた。特に朝日のカメラマンの眞野君がやられたときいたときは、一日心が暗かつた。彼とはまだ一度も口をきいたことはないが、北支、南支を通じて、各社從軍カメラマン中のピカ一だと思ひ、かつて僕は某誌上で大いに推賞したことあのある人である。

それから僕たちの近くでも、讀賣や同盟の連絡員が死んだり、傷ついたりした。また同盟の映畫班の人が、麟麒門附近でタンクに同乘してゐて、それに敵の野砲があたり、運轉手も射手も即死したのに、頭を少し負傷しただけで奇蹟的に助かつたといふ話をきいた。そしてその直後、氣球隊のところで、頭に繃帶をしてゐる男を見かけたので、近づいてみると、僕らは舊知の間柄である牧島君だつた。そこで彼のためにその幸運を祝したが、彼は頭が少し變だといふ。丁度そのとき上海へ向けて出發する東日の自動車便があつたので、それに頼んで彼を上海まで送つてもらつた。

氣球といへば、氣球と大砲とのチーム・ワークを傍でみてゐると、まるで野球のベンチのやうで實に面白い。それに日本軍の大砲の威力、その命中率は驚くべきものである。僕が見てゐたときは、丁度五千メートル距離で中山門の扉に孔をあけたところだつた。

「孔の大きさはどのくらゐか？」

とベンチからきいて、

「約二ミリで向ふが見えます！」

といふ返事だ。二ミリといふのは氣球の望遠鏡に映つた大きさで、實際はそれで十米くらゐあるといふ。そして後でそこから入城してみて、なるほどと思つた。

また高射砲に附屬してゐる大型の望遠鏡を見せてもらつたが、これでみると、紫金山のトーチカや中山陵まではつきり見える。南京もいよ〳〵目と鼻の間だ。

十二日は、前夜から銃聲、砲聲が絶えまなく聞え、僕は四時に眼がさめたまゝ、寒さと昂奮のあまり寢つかれないので起きて焚火にあたつてゐた。小坂君、つづいて中川氏も眠れないといつて起きてきた。

敵は最後に頑强な抵抗をつづけてゐるらしい。この調子では今日も入城は駄目かなと危まれる。

夜があけると、やはり早く起きて中山陵に近い馬群の方へ行つて來た志村君が歸つてきて、向ふへ行けば戰況がよくわかるから行つて見ないかとすすめる。時々彈がくるが、氣をつけて行けば大丈夫だといふ。

そこで恐る〳〵ついて行くと、なるほどあの輕快なチェッコの機關銃の聲がすぐ眞近に聞える。迫擊砲も近くで炸裂してゐるらしい。僕にはこれ以上進む勇氣がなくて尻込みすると、上海以來彈に慣れてゐる志村君は、ひとりで更に進んで行つた。

で、僕はそこから歸る途中、四五人で飯を食つてゐる兵隊さんと立ち話をして、戰況をきいてゐると、例のヒュル〳〵ッといふ者が耳もとで聞えて、たちまち十間ばかり離れたところに、轟然と迫擊砲が炸裂した。兵隊さんは箸を動かすのをやめただけだつたが、僕は全身氷を浴びたやうに冷りとした。恐らく顏は眞つ蒼だつたらう。

「いくら慣れてゐても、やはり彈は怖いですよ。」

と兵隊さんも慰めてくれた。僕は這々の態で逃げて歸つた。

それから約一時間ばかりすると小坂君も靑くなつて歸つてきた。彼の話によれば、やはり彼と立ち話をしてゐた兵士が、急に立つて小便をしに行くと、丁度その後へ小銃の流彈がピューンと落ちたといふのだ。

戰地へくると、誰も彼もみんな運命論者になつてしまふ。偶然よりほかに信ずるものも頼るものもなくなつてしまふからであらう。

四

その日の夕方近く、東日カメラ班の佐藤、榊原の兩君がやつてきた。別な部隊について前線に出て、幾日も連絡がきれてゐたのである。佐藤君とは、東京で特に親しくしてゐる間柄で、こんなところで會ふと、まるで十年も別れてゐた舊知にあつたやうに懷しいものだ。

同君たちの話によると、彼等の今ゐるところは、中山陵と谷を一つ隔てたところの丘陵に建つてゐる中央文化教育館といふ四階建の建物で、中には豪奢なソーファなどがあつて、こんな豚くさい民家とは比べものにならないといふ。それに第一、戰爭がすぐ眼の前に行はれてゐて、見るのに双眼鏡も何も要らないさうだ。

「その代り相當危險だらう？」

といふと、

「途中は少々危いが、中へ入つてしまへば絶對安全だ。」

そこで僕も決死の勇をふるつて、彼等に同行することにした。小坂君にもすすめたが、彼は南京入城を目前に控へて、君子危きに近づかずと、腰をあげない。

向ふには各社の特派員が十人ばかりゐるが、食糧に困つてゐるといふので、上海からトラックできた日本米、いろ〳〵な罐詰類などをしこたまリュックに入れて、僕たちは出發した。その前に、榊原君の留守宅で男の子が生れたといふニュースが、約半月たつて同君に傳へられ、その喜びを分つべく、一同紀念撮影をした。

目的の中央文化教育館は、その朝、迫擊砲に脅かされたところよりもまだ大部先で、途中砲聲の小やみになつた頃を見計ひ、身をかがめ、這ひなから走るやうにして、やつと無事到着した。しかし小便するにも外へ出てすることは禁物だと敎へられた。

入つてみるとなるほど立派な建物で、これなら迫擊砲でも、野砲でも大丈夫らしい。入口に近い一室を新聞記者團が占據し、奥は部隊本部になつてゐた。

われ〳〵がリュックを解くと、他社の人たちはワアーッと歡聲をあげて喜んだ。さつそく手わけして晩餐の仕度にかかなたが、僕だけはお客さまだといふので、どうしても手傳はなかつた。

そのまにそつと屋上に上つて、壁の間から外をのぞくと、中山陵が眞正面にあつて、それを中心に敵味方の銃口の火をはいてゐる光景が實によく見える。日は沈んで、紫金山から天文臺の方にかけて、やはり野火がちら〳〵燃えてゐる。

飯の支度ができたといふ知らせで下へ降りると、部隊長の方から、南京入城の前祝だといふので、日本酒をハンゴーに半分ほど記者團にも分與してくれたので、再び歡聲がどつとあがつた。それをみんなでのんで、久しぶりの豪奢な晩餐が終ると、誰かがいつた。

「テッカン和尙、お別れの一席をたのむ。それに今夜はお客樣もあるんだから、特に長講をたのむぞ。」

何のことからといふと、この記者團に、京都日出新聞の特派員で浪花節の得意なのがゐて、毎晩一同を喜ばせてゐるのだ。京都日出といへば、あすこの社長の後川晴之助は僕の三高時代からの友人で、後に僕が雜誌を始めたときに大變迷惑をかけた問柄である。そのテッカン和尙氏も、社長からかねて僕のことをきいてよく知つてゐた。テッカンといふのはどういふ字を書くのか、つひきき損つたが、そんなことはどうでもいゝ、とにかくこの尊稱だか愛稱だかをもらつて、彼はずつとこの一團(といふよりは一座といひたい)の人氣者になつてゐるのである。和尙といつても年は僕等より少いやうだ

が、どこかに禪的な瓢逸味が漂うてゐて、たしかに和尚といはれるだけの風格を具へてゐる。

彼は北支から中島部隊について上海に上陸して以來、最前線ばかりずつと進んで來たのであるが、偶然東日の榊原君と一緒になつた。そしてすぐ親しくなり、幾日も一緒に生活從軍してゐるうちに、お互に話すことの種がつきて、幼少年時代の思ひ出を話し合つた。榊原がいつた。

「僕の中學時代の同級に面白い男が一人ゐてね。さういつて榊原君の話し出すことをきいてゐた相手の男が、突然叫んだ。

「なんだ、それや俺のことぢやないか！」

榊原君も驚いた。

「なあーんだ、君だつたのか！　道理で奴によく似た男だと思つたよ。」

そこでこの二人の舊友が、十五年ぶりで手を握りあつて感激に浸つたといふのである。戰爭といふものは、ときにはかういふロマンチックないたづらをするものだ。

ところで、このテツカン和尚の浪花節だが、どうしてなかなかうまいもので、ちよつと素人ばなれがしてゐる。初めに虎造その他のものまねをいくつかやつて、それから「次郎長賣り出し」の長講一席、最後に小唄を二つ三つ吟んだ。なかなか藝人である。

「太夫うまいぞ！」

と誰かが半疊を入れると、

「太夫ぢやない、師匠といつてくれ。」

といふ註文だ。

まくらのところで、

「頃は師走の十四日……

といひたいところだが、明日はまだ十三日で、一日足りないのは殘念至極。それから

「蔭の三筋に操られ、ふびんながらもつとめませう……

どいふと、外では機關銃、追擊砲、野砲が、カタ〳〵、ヒュル〳〵ツ、ドーンツと鳴つて、お銚へむきの伴奏である。

——これが終つて、さらにもう一席註文したが、テツカン和尚も連日の野宿で「ひどく音聲を痛めてゐる」といふのでこれでうちきり、一同寢についた。

だが、僕だけはどうしても眠れない。もう一度屋上へ出てみると、戰爭の中心が中山陵から中山門に移つて、非常な激戰らしく、耳をすますと、砲銃聲や工兵の爆破作業の音に混つて突喊の聲まで聞えるやうな氣がする。冬らしくない軟か

味のある月光が、あたり一面を包んで、何ともいへない美しい、いや嚴肅な光景である。

日本史上に、東洋史上に、いや世界史上に、永久に記錄さるべきこの重大な日、重大な時刻に、どうして眠つてなどをれようか。眼はます〳〵冴えてくるばかりである。かくて僕は一時間以上も、きびしい寒さを忘れて、屋上に立ちつくした。

それから下へ降りると、數人の兵隊さんたちが火にあたつてゐたので、その仲間入りをした。見ればそこに「文藝」が一冊おいてある。僕は驚いて、

「これをわざ〳〵日本から持つてきたんですか？」

ときくと、兵士の一人が、

「いや、元からこゝの杭の上にあつたんですよ。」

と答へた。そこで僕はそれを手にとつて頁をくつた。何月號だか忘れたが、僕の書いたものも出てゐてひとしほ懷しかつた。

そのうちに夜は次第に更けて行つた。三時すぎだつたか、司令部に電話で中山門の落ちたことが報ぜられた。そこで僕は仲間にそのことを知らせて、すぐにも出發しようかと思つたが、夜があけるまでは危險だからと制止された。

かくて紀念すべき十二月十三日の朝はつひにきた。僕は未明に一同を叩き起して、出發の用意をした。

黎明のすが〳〵しい空氣を胸いつぱいに吸ひ、サク〳〵と霜柱をふんで、まづ中山陵に向つた。つんともう夜はすつかり明け放れてゐた。花崗石の大きな白い陵は、カムフラージュのため木の矢來で覆はれてゐた。

各社の寫眞班、映畫班が陵前の萬歲をカメラに收めた。もちろん僕も撮つた。テツカン和尚は、社長に送るんだといつて、僕の珍妙な從軍姿を寫した。

會員募集・月六回七册發行・半年拾壹圓・年貳拾圓

國際パンフレット通信

●海外諸國の新事情　新知識の翻譯紹介解說＝雜誌等とは比較し得ざる程迅速にしかも速報のみを主眼として、記事の正確さと解說力とに遺憾多き新聞報道の缺陷を補ふ特殊通信
四六判十二ポイント組三十頁乃至六十頁各册定價切＝毎月六回七册（一の日、六の日）發行

1074 支那事變と外國新聞論調（第四輯）
1073 世界の港灣と運河の現狀
1072 世界にニュースを拾ふ
1071 愛蘭から視た一九三七年の世界
1070 世界政治經濟日誌
1069 南アジアに始まつてゐる日英戰爭
1068 ソ聯邦の歐米赤化工作
1067 支那事變と外國新聞論調（第三輯）
1066 英國のアジアに確保する國防經濟力
1065 スペイン戰爭から得た軍事的教訓
1064

東京市麴町區有樂町振替東京六〇〇三番電話銀座三五二三
屋内容見本（ジヤパンタイムス出版部標本）
タイムス出版社

陵道の傍に敵の遺棄して行つた自轉車があつたので、僕はそれに乘つて中山門一番乘りをしようと思つた。そして陵前の坂道をい〜氣持で走つたのはい〜が、よく見るとブレーキがない。これはいけないと思つて、咄嗟に車を立ち樹にぶつつけた。

もちろんひどくころんだが、大した怪我はなかつた。ただ左の腕が痛んで、それから四五日、洋服の袖を通すのに痛みを覺えた程度ですんだのは幸せである。

中山門につくと、こゝも萬歳の嵐だつた。城門の前に立ち、その物凄い防備を見て、こんなものがよくもかく短日月に落ちたものだと驚嘆した。

すでに城内に味方は相當入つてゐるが、城門の内側に山と積まれた土嚢を取り除き、扉を開かないと戰車が入らない、戰車が入らないと市内の殘敵掃倒ができない。それまではわれ〳〵も市内に足をふみ入れることができない。

そこで城壁の上にあがつて遠く市内を望んでゐると、突然、ドカ〳〵〳〵〳〵と文字通りに百雷の一時に落ちるやうな音がして、向ふの方で砂塵が濛々と上つてゐる。敵機が襲來して爆彈を投じたのだ。しかしあまり高く飛んでゐるので、ほとんど姿も見えず、爆音もかすかにしか聞えない。すぐに味方の高射砲が一齊に火ぶたをきつて、それを追つぱらつてしまつたが、九機編隊でやつてきたらしい。幸ひ味方に大して損害はなかつたといふことだ。

門の扉があいて、戰車が入つたのは四時頃だつた。だからその晩僕たちは、城門に近い勵玄社の一室に宿をとつた。ことは支那軍のクラブで、日本の偕行社に相當するところだといふ。夕方ベッドを探しに地下室へ入つて行くと、そこから敗殘兵が三人とび出して、膽をつぶした。しかしすぐ味方の兵士に捕へられた。その翌晩も、宿舍にした飯店の裏庭で、豚を見つけてそれを殺すために拳銃を打つと、その音に驚いて、物置から敗殘兵が二人とび出して、豚退治の勇士たちの肝を冷した。

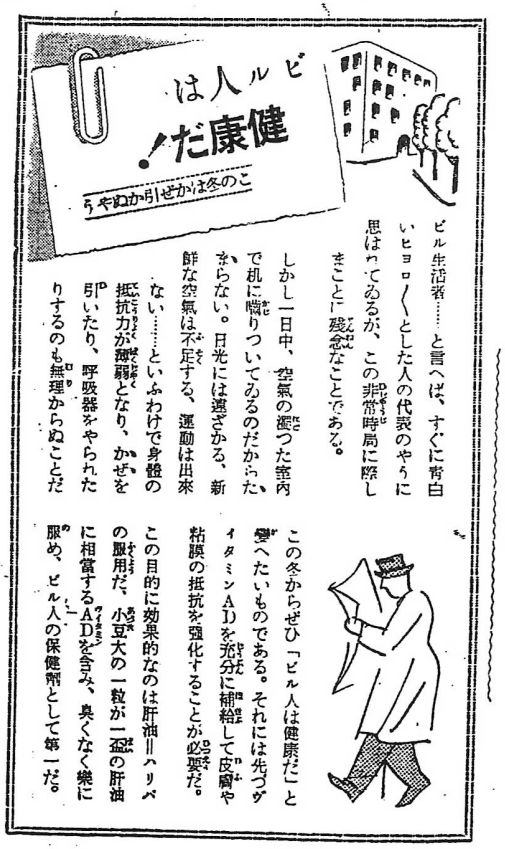
十三日の晩は、各自リュックの底に秘めてゐた最後のウヰスキーの瓶をとり出して、祝杯をあげた。中川畫伯も、連日の疲れで敗殘兵のやうな顔をしながら、大いにのみ大いにはしやいだ。

兵隊さんたちも、嬉しさのあまりいたるところで相擁して踊り狂つた。そして最後はどこも「露營の歌」の合唱に終つた。

翌十四日には、もう安全だといふので、國民政府、軍官學校等々を見て歩いた。しかしこれらの建物はいづれも、豫期してゐたよりは貧弱だつた。蔣介石の室なども、隨分質素なものだつた。國民政府など日本の縣廳にも劣るくらゐである。

それから南京市街全體が、植民地じみて殺風景である。北平の古さもなければ、上海の賑やかさもなく、香港の豐かさもない。どことなく薄手で、バラックじみてゐる。これは經濟的に發達したものではなくて、政治的に出來た市街だからだと思ふ。

南京市民の大部分は、どこかへ避難してしまつて、行きどころのない極貧層だけが、「避難地區」に集結してゐた。どこの町でも、氣の毒なのはこれら下層民である。誤つた指導者をもつた國家の大衆ほど憐れなものはない。

江灣の南朱宅といふところの或る家の壁に、つぎのやうな文句が書かれてゐた。恐らく逃げるに臨んで一筆書き殘して行つたものであらうが、これによつて今日の支那大衆の抱いてゐる氣持の一端を知ることができよう。

連敗將士知退却不進
日本反抗愴如向龍車
中國無孔明無關羽勇
敗殘國民奈邊求居住